

アーネスト・ヘミングウェイの *The Sun Also Rises* ——観光・身体・精神分析

日 影 尚 之

1. はじめに

アーネスト・ヘミングウェイの小説 *The Sun Also Rises* (1926)は、1920年代のパリに暮らす比較的若いアメリカ人たち(「失われた世代」)のヨーロッパでの享樂的生活を描く群像劇であり、同時代のアメリカを舞台にした F. スコット・フィッツジェラルドの *The Great Gatsby* (1925)とも共振しつつ、第一次世界大戦後の(欧米)社会に対するアメリカ(人)の空虚感、伝統文化に幻滅し価値を見失った「国籍離脱者」(“expatriates”)を描くモダニズム文学の代表作の一つとされる。

価値(感)の時代的变化の一つの現れは、アメリカの経済力(そしてその根幹にある近代合理主義)がヨーロッパや世界を支配するほどの勢いを見せるようになったことであり、例えば上西哲雄は *The Sun Also Rises* に様々なレベルでの「近代西洋合理主義の価値基準」＝アメリカの経済支配力を読み、上の両作品/両作家について次のように説明する。

『グレート・ギャッツビー』を補助線に『日はまた昇る』を読むと、ふ

たりの作家の間でアメリカが世界の経済の中心になろうとしているという認識では一致しているものの、それに対する批評と取り組み姿勢は微妙にそして根本的に異なる。フィッツジェラルドは、新しいアメリカの論理にすりよるものの、その波に乗るには繊細かつナイーブすぎる故に敗北する哀しさを描くことでアメリカを表現しようとした。

それに対してヘミングウェイは、背後に忍び寄るアメリカの論理を、それに直接従ったり対決したりするのではなくて、避けたり逃亡することによって表現しているように思われる。¹

このことは、金銭という価値こそが一番さっぱりしていていいじゃないか、という登場人物のコメントとして *The Sun Also Rises* に表現される。また、アメリカの経済力はドルをヨーロッパ通貨に対して強くした。強いドルを背景にヨーロッパ(特にパリなど)にやってくるアメリカの観光客も増え、アメリカ人を相手にする観光関連業もさかんになる。後述するように、観光(客)の問題は *The Sun Also Rises* と関係が深い。

戦争の後遺症という面もある。ヨーロッパの戦争ではあったものの、アメリカは第一次世界大戦に参戦した。義勇兵としてイタリア戦線に参加し負傷したヘミングウェイの体験は、言うまでもなく *A Farewell to Arms* (1929) を産み出すことなる。戦後のアメリカには、この戦争の退役軍人たちの様々な問題が生じる。例えば、彼らの年金の問題は後の大恐慌時代には社会問題に発展し、ヘミングウェイの作品 *To Have and Have Not* (1937) にも間接的な形で表現されている。² しかし、*The Sun Also Rises* の場合には、同戦争の負傷(兵)の問題が主人公/語り手 Jake Barnes の身体的喪失という直接的かつ象徴的な形で現れている。

以上挙げた点のうち、まずは、観光について、次に身体の問題について、もう少し詳しく述べていくことにしよう。

2. 観光

The Sun Also Rises に登場するパリに暮らすアメリカ人たちの姿は、第一次世界大戦後の消費文化を享受したアメリカ人たちの縮図である。Jake と Bill がスペインに向かう列車の中で遭遇するカトリック巡礼ツアー客たちは、フランスのルルドを目指しており、彼らが食堂を占領してしまうことを Bill や Jake は不愉快に感じている。聖地は(アメリカ人)団体ツアーという消費文化に組み込まれているようだ。主要登場人物たちが宿泊するホテルや彼らが訪れる店には多くの観光客がいるし、また、小説の後半で彼らが観光に行くパンプローナのサン・フェルミン祭(荒々しく危険な牛追いおよび名物の闘牛を含む)には、一層多くの観光客が集ってくることが作品でも描かれている。独特のリュウ・リュウダンスをする陽気な連中、ワインを豪快に飲むシーンなど、観光する人々がいっぱいである。これらの観光客は必ずしもネガティブに描かれているわけではない。

これとはまた別のレベルで、この小説は観光と関係が深い。Michael Reynolds によれば、作者ヘミングウェイはこの作品で旅行作家としてのすぐれた腕も発揮しており、パリの様々な通りや軒を連ねる店の描写はまるでパリのガイドブックさながらである。われわれ読者は、この小説の登場人物たちの示す価値観や道徳観念には加担することなく、しかし彼らとともに、パリのカフェや食べ物、ワイン、風景、旅行の秘訣、観戦スポーツなどを存分に楽しむことができる。この意味では、小説の悲しさよりも観光的描写の楽しさの方が勝るというわけである。この小説は観光的要素に満ちている。³ ほんの一例として書籍を挙げると、Noel Riley Fitch 著 *Walks in Hemingway's Paris: A Guide to Paris for the Literary Traveler* (New York: St. Martin's Griffin, 1989)は、地図および写真付きで、ヘミングウェイおよびその他の関連作家も含め、作家(やその作品)と関係のあるパリの各所を紹介している。

ただし、*The Sun Also Rises* の語り手 Jake(およびヘミングウェイ自身)によ

れば、Robert Cohn や Brett Ashley などとはちがって、彼は(新聞記者としての)仕事を持ち、経済的に自立しているし、経済観念は比較的しっかりしているようだ。だから、「Biarritz の連中」(“Biarritz crowds”)などの表現を使って、特に金持ちの観光客たちに対しては皮肉を込めて描いている。闘牛についても、語り手 Jake は、「アフィシオン」(情熱)のある自分は(特別な/選ばれた)人間であり、闘牛の本当の良さなどくにわかりもしない、のんきな見物客とは違うのだと、自分を区別しようとしているようである。金持ちを批判的に描くヘミングウェイにしてみれば、金銭的価値こそがさっぱりしてよいのではないかと登場人物に言わせたとしても、別の価値を示唆し、金持ちの買う商品としての観光旅行には批判的スタンスを取ろうとしているようだ。

3. 身体

この小説の、そしてヘミングウェイのもう一つの重要なこだわり(オブセッション)は身体の問題である。その中でも、特に傷を負った男の身体は、デブラ・モデルモグが言う通り、ヘミングウェイ作品の特徴である。

ヘミングウェイの小説では白人男性の主人公が深刻な負傷を——たいていは戦争時の業務に参加する時のものだが——負わないほうが珍しい。これら主人公がけがを負う男性的な領域を考慮すれば、傷や不自由な身体が主人公の男らしさやうまく事を成し遂げる能力を損なうことがなくても意外ではない。……ヘミングウェイ・ヒーローは顔よりも体に傷を負い、その傷はさまざまな方法で機能している。それはタフであることや、厳しく過酷な世界に耐え得る能力(ヘミングウェイの男性主人公がもつおなじみの特質)の指標としてだけでなく、白人で男らしく異性愛者であることの目に見える徴としても機能している——まるで白人男性の身体が無傷のままではそうした能力に欠けるかのように。しかし私がまた明らかにするように、傷はそれが和らげようとした不安を最

終的には増大させ異性愛者で男らしい身体を女性の、女らしさの、そして同性愛者領域へと移動させる。⁴

主人公 Jake Barns は第一次世界大戦で空軍パイロットをしている時に負傷し、ペニスを失ったらしい。一般的な解釈によると「男らしさ」を喪失した=去勢された Jake はイギリスで Brett Ashley と出会い愛し合うが、愛を成就することができないのである。しかし、彼は普段は冷静で、そのことについて感情的になる様子はあまり見せないようにしている(これはハードボイルド)。ただし、夜遅く一人パリの自分の部屋で自分の裸体を鏡で見た後、ベッドに入るがなかなか寝つけず、一人で泣くような場面は例外的にあり、逆に印象的でもある。また、Brett と二人きりになる場面では Jake は彼女と一緒に暮らせないか、一緒に行けないか、と感情的になる時がある。

Robert Cohn の身体については、大学時代のボクシングの腕前、テニスの腕前など、その強靭さおよび時には美しさが表現されてはいる。しかし、Brett に熱をあげる Robert は、Jake とは反対に冷静さを欠く行動が目立つ。よく泣き、興奮して Jake や Mike およびスペイン随一の闘牛士 Pedro Romero に暴力をふるう。Robert とは対照的に Pedro Romero の身体は(語り手 Jake を通して)常に美しく描かれる。そこに Jake の(ヘミングウェイの)ホモ・エロティックな欲望/視線を読むことは容易である。

では Brett の身体描写はというと、「女性的な」身体線は表現されるが、ショートカットの髪型など、伝統的意味で「女性的」ではない面もあり、だから小説の終わり近くで Pedro Romero と駆け落ち(未遂)した時に、もっと「女性らしく」なるように求められたのよ、と Brett が Jake に語る場面がある。第一次世界大戦後の欧米社会で様々な伝統的価値観が変わりゆく時代の、伝統的なジェンダーの揺らぎをヘミングウェイ作品に見つけることが通常の読みである。

Dana Fore によれば、Jake の負傷した身体の問題を考えると参考にするべきは、体に傷も持つ貴族 Count Mippipopolous (ミピポポラス伯爵)およびかつ

てのスター闘牛士 Belmonte である。Jake たちと比べるとずっと高齢らしき伯爵は、Brett らとよく遊びはするものの肉体的関係は持たない/持てないようだし、そのことをくよくよしたりはしない。しかし Jake は伯爵のように「すべてを楽しむ」負傷後の人生を送る気にはなれない。一方、かつての大スターで闘牛士職に復帰した Belmonte には、観客の期待に答えるようなかつての輝きはなく、若い Pedro Romero の正直さや精悍さとは対照的に、腐敗および倦怠のイメージがつきまとう。身体の衰えにもかかわらず、無理をして昔と同じ身体的パフォーマンスを見せようと工作する Belmonte も Jake のロール・モデルにはならない。

戦後アメリカで負傷した退役軍人に関しては、四肢(またはその一部)の喪失など一目ですぐわかる負傷者に対しては一時的であれ、国ために名誉の負傷をした英雄との視線が注がれたという。しかし、Jake の場合のように、目には見えない、見せられない＝隠して秘密にしておくべき負傷を背負った者は、その喪失を恥辱の印として意識する。一緒にマス釣りに行く Bill Gorton が Jake に対して使う“expatriate”という言葉は ex(元) + patriot(愛国兵)つまり退役軍人とも受け取れるのであり、Bill が何度も言う「アイロニーと憐憫」は、公にできない負傷を恥辱に感じ続ける Jake のことにも触れているようだ。この小説は、健全者社会の「ノーマル」ではない性行為および性的満足のヒントを暗示しながらも、伯爵のような生き方、(Bill Gorton が Jake に買うよう勧める)ぬいぐるみの犬のような、Brett の遊び道具になる道しか示していない、と Dana Fore は結論づける。⁵ ちなみに、小説の最後を多少なりとも前向きに読むか、何の変化もない閉塞状態のままと読むか、は批評により意見の分かれるところである。高野泰志は「結末部分でのジェイクは、否定疑問文の形でブレットに答えることで、[ノーマルな意味での愛を成就できないという]厳しい現実から目をそらすことの無意味さを示唆しているのである」として、Jake の変化を指摘している。⁶

4. 精神分析的かつポストモダンな読みの例⁷

The Sun Also Rises を最終的に前向きに読むか、否定的に読むかを考えるのではなく、ポストモダンなテキストとして、精神分析的に読む例を最後に紹介しよう。Ben Stoltzfus によれば、登場人物たちの繰り返す強迫的行動、なかでも Jake と Brett の移動は、フロイトの言う喪失と挽回の「Fort!/Da!ゲーム」を再現している。また、この作品に対して様々な相矛盾する解釈がなされていることを考えると、それはこの小説が、リアリズムの意味での人物/テキスト分析というより、テキスト中の言葉そのもの、特に同音同綴異義語、意味の生産物としての語の痕跡などを見ることを求めていると考えるべきである。ポストモダンな意味で、小説の主人公は、登場人物ではなく、言葉そのものおよび書くことである。ヘミングウェイの省略の文体そして読者の参加/共犯関係を求める点が、こうした方向性を示唆する。

小説の最も重要なメタファーの一つはインポテンスであるが(Jake の身体的インポテンスのみならず、省略の文体=情報の省略/欠落という虚勢を受けた読者の知りたいという欲望に対しても)、インポテンスおよび“書くこと”の意味を精神分析的に見るべきである。writing(書くこと)は riding(タクシーや列車に乗ること)と pun のように発音がよく似ていること、そして、電報、手紙、新聞の特電、小説(を書くこと)は猶予、欲望、抑圧の徴候である可能性があり、その徴候が何を象徴するのか考える必要がある。writing(書くこと)と riding(乗ること)が発音上も酷似し、テキスト上も関係が深いとすると、フロイトの『快樂原則の彼岸』の文脈では、小説の愛のゲームと列車での旅、人物たちの出発と帰還は special(スペシャルな=特別な)/spacial(スペーシャルな=空間的な)意味を帯びる。メッセージが届いたり、目的地に到達したりするのだが、それはリアリズムの読み方が明らかにする以上のことを言っているはずだ。

読者は繰り返される言葉や行為の累積的な価値/意味を理解することが必要である。リアリズムのテキストの場合なら、読者はテキストの言葉が現実

世界の人物や物や出来事を指示すると信じる。たしかにヘミングウェイの描写力は現実の場所、現実の人間や物や出来事(パリの通りやバスク地方の風景、パンプローナの祭りなど)を意味/指示すると思うに充分であるが、ポストモダンなテキストでは、意味は主として、相互に関係し合う記号のネットワークに由来する。伯爵の友人でギリシア人芸術家だという男の名前“zizi”はフランス語で男の子のペニス。Brett と伯爵と Jake の3人の会話などで連想されるように“Jake”は“joke”と似ており、Jake の負傷を言う“joke front”は彼の喪失したペニス“Jake’s front (part)”に滑り移る。

Jake と Brett の関係はフロイトの言う Fort!/Da! ゲームである。この場合 Jake は(フロイトの孫の)Ernst で、Brett が母(代わり)の糸巻きである。Brett が Jake 以外の男と行く先は(Ernst と同じように)ベッドであるが、はがき、電報(wires, telegrams)という紐で Jake と Brett は常に結びつけられており、これは Ernst の糸巻きと同じである。Jake が Brett を(別の男と)送り出すのは、送り出すことが、取り戻すこと的前提になるからである。喪失と回復のゲームは Brett から見ても同じことである。状況を支配しようとする努力なのだ。

パリとパンプローナの間にある都市サン・セバスチャンは、Ernst の赤ん坊ベッドと同じように、すべての登場人物を引きつける。パンプローナの闘牛に行く時 Jake はいつもこの都市を通り、Mike と Brett もここを通過してパンプローナに入る。Brett と Cohn の情事があるのもこの都市である。Jake が San Fermin 祭の後、すぐパリには戻らず、Brett から電報を受け取るのもここである——ここでの Jake のコメントは“*Well, that meant San Sebastian all shot to hell.*” 聖セバスチャンという歴史上の人物は、キリスト教信仰のせいでローマ皇帝に処刑された(殉教した)。多くの宗教絵画の題材となるが、立ち姿で腰布だけを身につけたほぼ裸の体に多数の弓矢の刺さった聖セバスチャンを描いたマンテーニャの絵画は有名である。第一次世界大戦で傷ついた/殉職したアメリカ人たちがいる時代、苦しむ Jake ら登場人物がこの都市に引きつけられるのは必然である。戦後の傷(ミビボポラスの弓矢傷、その他の傷、Jake のインポテンス)を思うとき、Jake のコメント「みんな射られて/撃たれて地

獄に落ちる」のアイロニーはサン・セバスチアンの殉教だけでなく、ヘミングウェイがこの小説で繰り返し使う“hell”“damn”“damnation”という言葉とも響き合うし、Jake がやはりこの都市で見かける片腕の男(フランス語で manchot の発音)は英語の“man shot”に滑り込む。サン・セバスチアンで Brett からの電報が届き、それは自分たち2人を結ぶものだ、と Jake は言う。電報(ワイアー)は現前と不在を結ぶ「紐」である。電報の交信は、ことばという紐によって2人を結びつける回復の行為である。

小説の結末付近で、Jake と Brett はタクシーに乗ってパレスホテルでマティーニを飲み、パリに帰る列車に乗る手配をする。そして Botin's で昼食を共にし、昼食後2人はタクシーに乗り Gran Via あたりに曲がったところで最後の有名な場面となる。騎馬警官が警棒を挙げたところで2人の乗るタクシーは急に止まる。進むことを禁止されたかのようにでもある。タクシーというと、何度も登場する言葉 taxi, taxidermist(剥製師), hell などとの連想から、中身・実質のない生、すなわち死を想起させる。また、振り上げられた警棒は(進行)禁止の印であるが、それは幼児(男の子)を母親から引き離す父親/祖父の命令(Law)であり、それは Jake の罰/去勢と通じる。

しかし、Jake のインポテンスという欠落/喪失こそがこの小説を(Jake に/ヘミングウェイに)語らせる/書かせるのであり、すべてを結ぶメタファーである。結局、writing(小説を/文章を書くこと)、riding(タクシーや列車に乗ること)、電報やはがき(telegram, wire, postcard)、fishing lines(釣りの糸)、railroad lines(鉄道)、the end of the line(最後、どんづまり)、the lines of the novel(小説のせりふ)などは、相矛盾するもの——欠落と現前、喪失と回復——を結びつける糸であり、(死への)欲望と生(=死の猶予)を結ぶものである。

注

1. 上西哲雄「国籍離脱者と残留者のきずな——ヘミングウェイとフィッツジェラルドを結ぶもの」, p. 172. 今村楯夫 編『アーネスト・ヘミングウェイ

イの文学』(ミネルヴァ書房, 2006年)所収.

2. 日影尚之「アーネスト・ヘミングウェイの *To Have and Have Not* と最近の批評」, p. 97 など参照. 『麗澤レビュー』17 (2011)所収.
3. Michael S. Reynolds, *The Sun Also Rises: A Novel of the Twenties* (Boston: Twayne, 1988), pp. 49-50 など.
4. デブラ・モデルモグ『欲望を読む——作者性、セクシュアリティ、そしてヘミングウェイ』島村法夫・小笠原亜衣 訳(松柏社, 2003年), pp. 224-225.
5. Dana Fore, “Life Unworthy of Life?: Masculinity, Disability, and Guilt in *The Sun Also Rises*.” In Linda Wagner-Martin, ed., *Hemingway: Eight Decades of Criticism* (East Lansing, MI: Michigan State UP, 2009), pp. 37-54.
6. 高野泰志『引き裂かれた身体——ゆらぎの中のヘミングウェイ文学』(松籟社, 2008年), p. 140.
7. Ben Stoltzfus, “Ernest Hemingway: *The Sun Also Rises* Writing the Pleasure Principle in a Postmodern Context.” In his *Lacan and Literature: Purloined Pretexts* (Albany: State U of New York P, 1996), pp. 50-66.

参考文献

- Bloom, Harold, ed. *Modern Critical Interpretations: Ernest Hemingway's The Sun Also Rises*. N. Y. : Chelsea, 1987.
- Bryfonski, Dedria, ed. *Social Issues in Literature: Male and Female Roles in Ernest Hemingway's The Sun Also Rises*. Farmington Hills, MI: Greenhaven P, 2008.
- Hemingway, Ernest. *The Sun Also Rises*. New York: Scribner. 1926.
- Reynolds, Michael S. *The Sun Also Rises: A Novel of the Twenties*. Boston: Twayne, 1988.
- Stoltzfus, Ben. *Lacan and Literature: Purloined Pretexts*. Albany: Sate U of New York P, 1996.

Stoneback, H. R. *Reading Hemingway's The Sun Also Rises: Glossary and Commentary*. Kent, OH: Kent State UP, 2007.

Wagner-Martin, Linda, ed. *Hemingway: Eight Decades of Criticism*. East Lansing, MI: Michigan State UP, 2009.

今村楯夫 編著 『アーネスト・ヘミングウェイの文学』 ミネルヴァ書房, 2006年.

日本ヘミングウェイ協会 編 『ヘミングウェイを横断する——テキストの変貌』 本の友社, 1999年.

フロイト, ジークムント. 『S. フロイト自我論集』 竹田青嗣編、中山 元訳. ちくま学芸文庫, 1996年.

高野泰志 『引き裂かれた身体——ゆらぎの中のヘミングウェイ文学』 松籟社, 2008年.

モデルモグ、デブラ. 島村法夫・小笠原亜衣 訳 『欲望を読む——作者性、セクシュアリティ、そしてヘミングウェイ』 松柏社, 2003年.

